

## 天台智顗と「諸経之王」

研究員 宮部 亮佑

天台智顗が『法華経』を重視したことは論を俟たない。

特に、『法華経』巻四（法師品）所説の高原鑿水喩に見られる「声聞の法を決了する 是れ諸経の王なるを聞き（大正九・三二上）」という経文は、開三願一の経証として三大部に散見されるものであることから、天台智顗は要文として捉えていたことがわかる。一方で、天台智顗の教判に依れば方等經典に分類される曇無讖訳『金光明経』卷一（序品）にも「是の金光明は 諸経の王なり（大正一六・三三五中）」と出る。すると、「諸経の王」はどのような意味を持つのであろうか。天台智顗による『金光明経』の解釈から一考察を試みた。

まず天台智顗の『金光明経』理解は、『金光明経玄義』（教玄義）に第三時の方等經典とする。第三時は大乘經典が広く収められる時間区分であり、藏通別円の四教すべてが説かれるとされる。そこで『金光明経』の場合は通教とされ、また別を帶し円を明かすという經典であると理解されている。

こうした經典に説かれる「諸経の王」について、『金光明経文句』では、経王について文・理・文理の三方面から「経」とする解釈を挙げ、それぞれを三種の俗諦・真諦・中道に配当するのである。さらにこれら以外を説く場合は

「王」にならないとし、中道を説くことが「経」であり「王」であると強調する。また、「経王」が名字不同であり、諸経によって表現が異なることが述べられるのである。ところでこのように経体の異名を説きながらその実は一つであるとする説は、『法華玄義』所説「実相の異名」を想起させる。しかし『金光明経文句』で指摘する経体と、『法華玄義』所説の「実相の異名」は合致しない。

この理由について、『金光明経文句』が『法華経』の諸経の体とする安樂行品所説「髻珠」を検討すると、『法華文句』（釈安樂行品）では、髻珠を無上のものとして捉えることができないという、機根が整っていない段階が示される。すなわち、教としては髻珠や実相と説かれるものであっても、それを受ける衆生側の機根が未熟であり、受け入れられない状態が述べられるのである。

このような「経王」について、天台智顗は『金光明経玄義』において別角度から論ずる。同書では十種三法によって經典の理解を試みるが、その第一に挙げられる三徳について、天台智顗は三徳の「三」を法身・般若・解脱に配当し、「徳」に常樂我淨の意味があるとする。さらに三徳それぞれに常樂我淨の四徳をそなえるとするのである。

こうした三徳と四徳とを用いる解釈は真諦三蔵も行なっていたことを天台智顗は指摘するが、一方で真諦三蔵は法身に四徳をそなえるが般若と解脱にはそなわない理解であるとし、その理由として真諦三蔵は別教の理解であって

用い方に偏りがあるとするのである。こうして天台智顗は、『金光明經』の經文で明かされる三徳には、ひとつひとつに常樂我淨がそなわると強調し、無量かつ甚深とするのである。つまり『金光明經』は帶別明円の通教經典とされながら、「諸經の王」とされる立場が天台の理解なのである。

ところで、『法華經』所説の「諸經の王」について、『法華文句』（釈法師品）の場合あまり言及がなく、「諸經の王」の長行部分である經文「開方便門示真實相」の經証として扱われる程度である。

すると「開方便門」する經典は「諸經の王」として捉えることができるのではなからうか。特に天台智顗は大乗經典には広く諸法實相が説かれていると主張する。すなわち、大乗經典という観点からであるならば、「諸經の王」は經典の優劣を説くものとはならない。つまり「諸經の王」はどの經典にも説かれているが、それを理解できるかどうかという、対告衆の機根の問題が厳然として經典に存在することを、「諸經の王」の理解を通じて天台智顗は示唆したと考えられることを論じた。